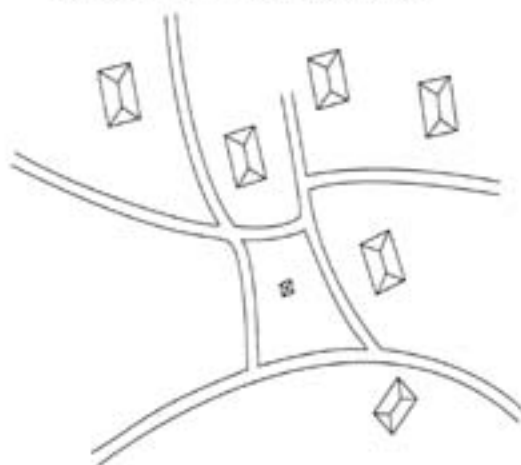




第10図 ナホー村内の道の概念図



第11図 クム族の道の概念図

道などが観察されるということになるのである。これは、集落遺跡での道の在り方を暗示する可能性があると考えられないだろうか。

5 遺構と道跡

次に、遺跡の中での道の在り方という意味で、遺構と道跡との関係について個々の遺跡について若干考察を行なってみたい。

(1) 上野原遺跡

遺跡は、全体として北側にある程度の傾斜をもって傾いている。今でこそ平坦であるが、発掘調査では数多くの谷や道が入り込んでいる様子が明確になってきている。つまり、現在のように見渡すかぎり平坦な地形ではなかったということである。

台地が形成されて長い年月が経ち、流水作用によって相対的に低いところが徐々に削られ、道や谷となって侵食されて行く。そうすると、相対的に高かったところは小台地あるいは尾根状の高まりとして残っていく。

広い場所がない場合には、瘦せた尾根をも使って住居を、そして小集落を作っていく。ある程度の広さを持つ台地で

あれば、道避けて台地上に住居を、そして集落を形成していったと考えられる。

後者の例が、上野原遺跡を始めとしてここに取り上げた多くの遺跡ということになろう。

上野原遺跡では、東および西という両方の道に囲まれた中央の台地部分を中心として集落が形成されている。これは、もちろん一時期に形づくられたものではなく、幾時期かに渡った結果ではあるが、それでもこの2本の道を挟んだ台地の部分を、集落の主たる形成場所として位置付けて住居を造り、最終的に“最古最大級”の縄文早期前半の集落跡となったことは疑いのない事実であり、そのことからこの時期の集落形成の在り方として捉えていく必要があると考えられる。

つまり、発掘調査によっても、調査区の東及び西それぞれに南側にはこの時期の遺構は広がっては行かないという事実があることである。縄文時代早期前半前平式期の集落は、これで収束するのである。

2002年3月刊行の第2～7地点の正式な報告書には、堅穴住居跡の埋土による最終的な細分類の結果が掲載しており、4つのパターンに分類してある²¹⁾。

- A P-13 火山灰が堆積していないもの
- B P-13 火山灰の黄色パミスが堆積しているもの
- C P-13 火山灰の白色パミスが密集して堆積しているもの
- D P-13 火山灰の白色パミスが散在して堆積しているもの

[A…13軒、B…6軒、C…8軒、D…25軒]

そして、堅穴住居跡埋没とP-13火山灰との関係をA→B→P-13降下→C→Dとしている。

それはそれとして、ここで道跡全体としての地形上の使われ方を見たい。

中央部の台地は北・中・南及び最南区に概略区分されるように思われる。北部には住居跡20軒、連穴土坑6基、集石12基のほか、土坑多数と土坑群1基が見られることから、住居及び調理など本遺跡でも中心的生活域と捉えることができよう。もちろん、一時期による形成ではないが、幾時期かに渡っているのが事実であったにしても、本遺跡においてこれほど遺構が集中している箇所は見られないことから、また何より土坑群としてまとまったものはここにしか見られないことから、この区域を生活の中心域と捉えることは問題ないと考えられる。

中部には、住居跡3軒、連穴土坑0基、集石10基それに土坑18基が見られ、土坑の性格は個々に最終的に判明していないことから明確なことは言えないものの、少なくとも調理の場としての利用が考えられることは否定されないであろう。土坑の性格にもよるが、道跡全体として見た時、ここは“広場”的な性格を持った場所と言えなくもないように思われる。